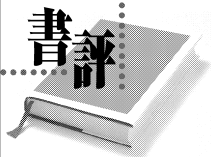


書評



大熊輝雄, 松岡洋夫, 上埜高志 著
齋藤秀光, 三浦伸義 執筆協力

脳波判読 step by step 入門編 (第4版) 脳波判読 step by step 症例編 (第4版)

松浦雅人

臨床脳波判読医養成に効果的な標準テキスト

脳波は波形が複雑に変動するだけでなく、頭蓋上の多くの部位から長時間にわたって記録するため、全体を総合的に把握しなければならない。初学者にとってはどこから手をつけてよいかわからず、取りつきにくいとの印象を持つのもうなずける。本書はこれから脳波判読を習得しようとする人のために書かれたもので、初版が1986年なので20年の歴史を持つことになる。前回の第3版の改定から7年を経過し、今回さらに加筆・増補が行われた。

「入門編」ではステップ1からステップ14まで、段階を追っていねいに脳波判読の手ほどきをしてきている。各ステップにはたくさんの練習問題がついており、たとえば1週間に1ステップの練習問題をクリアすることを目指すれば、3~4か月で脳波判読の基本を修得できる。脳波図版は原寸大であり、計測用の脳波スケールがついているのも親切である。手を使って脳波波形にスケールを当てて、実際に計測することではじめて波形の観察力が深まる。ステップ1では周波数や振幅の計測のしかたを体験し、次いでステップ2からステップ3にかけて位相や左右差、分布や局在など、次第に複雑な波形の計測法を学ぶ。さらに、脳波記録法、アーチファクト鑑別法、賦活法、成人脳波、睡眠脳波、異常脳波とステップアップしていく。ステップ11からは小児脳波の分野に入り、ステップ14の老年者の脳波判読を終えると、すべての年代の脳波判読をカバーしたことになる。

「症例編」ではステップ1のてんかんから、ステップ11の精神疾患まで、脳波判読にとつ

て重要となる疾患が網羅されている。今回の改訂では、レビー小体病や白質脳症など最近注目されている疾患の脳波や、選択的セロトニン再取り込み阻害薬(SSRI)や非定型抗精神病薬による脳波変化が追加されている。最後のステップ12には33個の練習問題がついており、これにチャレンジすることで自らの臨床脳波判読の実力を確認できるように工夫されている。

「入門編」「症例編」に共通する特筆すべき点は、個々の脳波図版の説明として記載されている「脳波所見」が、そのまま脳波記載法の範例となっていることである。脳波判読ができるようになれば、その所見を的確に記載する技術が必要となるが、本書は豊富な記載例を提供してくれていることになる。このような脳波図版が、「入門編」では103枚、「症例編」では178枚もある。長年にわたって貴重な臨床資料を蓄積し、さらに新しい情報を追加しつつある東北大学脳波グループの努力に敬意を表したい。

最近では、臨床脳波を正確に判読できる医師がどんどん減っているように思われる。不正確な脳波判読は誤診の原因となるため、脳波判読医がいない施設は脳波検査をしないほうがよいとの極論もある。脳波指導医は臨床脳波が判読できる若手医師の養成に苦慮していると思われるが、本書を利用することによって判読医養成がより効果的になると思われる。脳波専門医にも目を通してほしい臨床脳波判読のための標準的テキストである。

(東京医科歯科大学大学院・生命機能情報解析学)

入門編：●B5 468頁 2006 定価7,875円(本体7,500円+税) 医学書院

症例編：●B5 404頁 2006 定価9,450円(本体9,000円+税) 医学書院